

# 野生種から現代バラへの道のり

野村 和子

(NPOバラ文化研究所理事)

恵泉女学園花と平和のミュージアム南野バラ園  
オープニング記念講演会

Roses : From Wild species to Modern Roses

NOMURA Kazuko

この講演に先立ってバラ園を見てきましたが、よく育ち、花もよく咲いていて、3年前開墾をはじめた当初にくらべると、格段にすばらしいものになっております。これからへの期待度が高まりました。これらはすべて、大学の教職員、学生、同窓会、公開講座の受講生の皆様の総力をあげてのご協力のおかげと感謝申し上げます。

ここ恵泉南野バラ園は、一般のバラ園のイメージとは程遠く、ほとんどが野生種のバラで構成されています。当初、同窓会の皆様からここにバラ園をつくりたい、そして大学側からは無農薬で、とご相談いただいたとき、それではいっそのこと、他所にない「野生種のみで構成するバラ園」にしたらどうだろうとご提案しました。野生種であれば栽培種よりかなり丈夫で、無農薬にも耐えられるはずだし、現在のバラに至るまでの改良の過程についても学ぶことができます。また、これからのバラの新しい方向性も探ることができるでしょう。これらがそのおもな理由でした。はたしてヨーロッパの野生種が日本の土壤にどこまで適合するか、また、全く農薬を使用しないで、日本の気候条件の中でどれだけ病虫害を回避できるのかなど、課題はありますが、花の美を求めて人の手により改良を重ねられてきた現代バラと比較すれば、野生種は、はるかに無農薬に対応できるだろうと考えております。

このような恵泉女学園大学の南野バラ園は、ひとことで表現すると「フィールドミュージアム」と言えるのではないかと思います。フィールドは野原、畑、現場などの意味をもち、ミュージアムは博物館です。この場合「博物館機能を兼ね備えた植栽」という位置づけが適切でしょうか。

博物館とは人類の足跡を集めてあるところです。人の歴史を遡り、失ってはならない遺産を保管するのが博物館の役割ですが、そのみならず、先人が知恵をしぼって築きあげてきた様々な結晶、そこから私たちが何を学び、どう未来に生かしていくかを考えるところにその使命があるといえるでしょう。

野生種のバラと現代バラに至る過程のオールドローズを合わせてヘリテージローズ（歴史的遺産のバラ）と称します。地球上に存在したバラを蒐集し、性質を見極め、なおかつ、それら野生種を原点としてどのような過程を経て現在のバラに至ったのか、そして改良も含めて、地球のために、人類のためにこれからのバラをどのように考えていくかを学ぶ場、それが「フィールドミュージアム」の役割ではないでしょうか。

## 野生バラとは

バラは地球上で、南半球には自生がなく北半球にだけ分布しています。およそ150種あり、日本にも16種類くらいあります(20種という学者もいます)。中国には約90種、ヨーロッパに20種、北アメリカに20種あります。落葉低木で、枝は半つる状に伸びるものが多い。葉は奇数羽状複葉で托葉があり、花弁数は5枚、花色は白から紅、まれに黄色もある、これらが特徴といえます。もちろん原点は春だけの一季咲きです。

当バラ園ではこれらのバラから厳選し、日本、中国、ヨーロッパ、北アメリカと自生地別に4つの地域に分けて植栽しました。



## 当バラ園に植栽した主な野生種—四つの地域別に—

### 日本

ノイバラ (*Rosa multiflora*) 日本全国に分布し、フロリバンダ系やポリアンタ系の改良の基となっている。接ぎ木の台木にされる。



ツクシイバラ

ツクシイバラ (*Rosa multiflora adenochaeta*) 熊本県球磨川河川敷に今も多くの自生が残る。サクラのような花で栽培種に劣らず美しい。つる性。

テリハノイバラ (*Rosa luciae*) 海岸や明るい山地の斜面に自生し、枝は長く伸び、つるバラの基となるランブラー系の基本種。

ハマナシ(ハマナス) (*Rosa rugose*) 太平洋側は茨城以北、日本海側は鳥取以北の海岸に自生し、花は大きく、紅紫色で香りが強い。

サンショウバラ (*Rosa hirtula*) 富士山周辺に自生。サンショウに葉が似ていることから命名。淡いピンクの一日花。大木になる。

### 中国

*Rosa chinensis semperflorens* (Slater's Climson China) 18世紀にヨーロッパに導入され、四季咲き性を伝えた最初の4種の一つ。

*Rosa hugonis* 野生種では少ない淡い黄色の花をつける。



*Rosa banksiae normalis*

*Rosa banksiae normalis* モッコウバラの原種で、花は白く一重咲、香りがよく刺があり、実もつく

*Rosa roxburghii normalis* 日本原産サンショウバラの基本原種で中国に自生する。サンショウバラのような大木にはならない。

### ヨーロッパ

*Rosa canina* ドッグローズともいわれ、ヨーロッパでごく一般的な種。実をヒップティーとして利用し、根は台木にする。

*Rosa glauca* 紫味のある独特な葉とカリンのような花が特徴。冷涼地を好む。

*Rosa eglanteria* 葉をこするとリンゴの匂いがし、ハーブとしても扱われる。



*Rosa canina*

*Rosa spinosissima* スピノシッシマの名の通り、細い刺が非常に多い。葉も細かくて9～11枚の小葉からなる。

### 北アメリカ

*Rosa palstris* 花は中くらいのピンクで、秋になると真っ赤な丸い実がたくさんつき、葉も美しく紅葉する。

*Rosa foliolosa* 葉が繊細で細く、きれいに紅葉し、赤い実も美しい。コンパクトな樹形。



*Rosa arkansana*

*Rosa setigera* 枝はつる状に伸びる。やや濃いピンクの花を6月末から咲かせる。

*Rosa arkansana* 鮮やかな桃紅色の花は目をひく。枝は半つる状に伸びる。

### 栽培原種の出現

すべての野生種が改良されて現在のバラに至ったわけではなく、古代の

人々が山野から美しい野生種を選び、栽培し、選抜改良を重ねた結果、いくつかの栽培原種がおのずから残ったと言えます。

ガリカローズ (*Rosa gallica*) 南フランスから西アジアにかけて自生、紅色の大輪で香りがよい。ガリカ系の基本種。

サマーダマスク (*Rosa damascena*) ガリカローズに西アジアのロサ・フェニキアが自然交雑されたと考えられている。ダマスク香を現代バラに伝える。またバラの香油はこの種から採取することが多い。ダマスク系の基本種。

オートムダマスク (*Rosa damascena bifera*) ガリカローズにロサ・モスカータが自然交雑されたものとされ、わずかに秋に咲くことからオートムダマスクといわれる。香りがよい。

アルバラローズ (*Alba maxima*, *Alba semi-plena*) サマーダマスクにロサ・カニナが自然交雑されたものと考えられている。白の花色を現在に伝えるアルバ系の基本種。さわやかな香りがある。

ケンティフォリアローズ (*Centifolia*) 16世紀ころ交配されて出現したと考えられ、centi(=100), folia(=花弁)の名のとおり100枚にもおよぶ花弁をもち、大輪で香りがよい。ケンティフォリア系の基本種。

以上が中心のピラミッドの花壇に植栽しており、植えて間もないのによく咲いています。



ガリカローズ



ダマスクローズ



アルバラローズ



ケンティフォリア  
ローズ

上記の栽培原種に、中国からヨーロッパに導入された最初の4種の四季咲き性のチャイナローズ＝パーソンズピンクチャイナ（オールドブラッシュ）、スレイターズ・クリムソンチャイナ、ヒュームズブラッシュ・ティー・センテッドチャイナ、パークスイエロー・ティーセンテッドチャイナなどが交配されてたくさんのオールドローズの系統に発展していくのですが、それは19世紀の後半のことになります。

### 19世紀に出現した系統

- ・ ポートランドローズ（オータムダマスク×スレイターズ・クリムソンチャイナ）
- ・ ブルボンローズ（オータムダマスク×オールドブラッシュ）
- ・ ノワゼットローズ（オールドブラッシュ×ロサ・モスカータ）
- ・ ブールソーローズ（ロサ・キネンシス×ロサ・ペンデュリナ）
- ・ チャイナローズ（ロサ・キネンシスが発展）
- ・ ティーローズ（ロサ・キネンシス×ロサ・ギガンテア）
- ・ ポリアンタローズ（ノイバラ×ロサ・キネンシス）
- ・ ハイブリッドパーペチュアルローズ（上記の各系統が交配され、出現した系統）

以上は栽培原種も含めて、現在オールドローズと呼ばれています。

### モダンローズの誕生

オールドローズのうち、ティーローズのマダム・ブラヴィとハイブリッドパーペチュアルのマダム・ヴィクトール・ヴェルディエが交配されてできたバラを「ラ・フランス」と名付けました。「ラ・フランス」は新しい系統名ハイブリッドティーローズの第1号となります。これがモダンローズの第1号でもあるのです。1867年のことで、



ラ・フランス

日本では江戸幕府が大政奉還し、翌年が明治維新という近代化の道を歩み始めた年にあたります。時を同じくしてバラもまた新しい一歩を踏み出したということになります。

それまでのバラは花首が弱くうつむいて咲くものが多かったのですが、このラ・フランスは花首がしっかりしていて、花は上を向いて咲きます。そして従来の花は花弁数が100枚にも及ぶものが多かったのですが、ラ・フランスは花弁数が40枚くらいと少なく端正な花形であり、完全な四季咲性であることなどから、新しくハイブリッドティーローズという系統名を与えられたのです。その後この系統は全盛期を迎え、多彩な色彩、より端正な花形など、美しい品種がつぎつぎと発表されました。そしてこのハイブリッドティーローズ(大輪四季咲き)からフロリバンダローズ(中輪房咲き)やミニアチュアローズ(小輪房咲き)などが誕生していくのです。

さらにオールドローズのもつ丸いカップ状のやさしい花形、うなだれて咲く風情、よい香りなどを残そうとオールドローズにハイブリッドティーローズを交配することが試みられました。それが最初に発表された一連のイングリッシュローズになります。その後イングリッシュローズに準ずる花形の新品種が多く発表されていますが、それぞれ独自のグループ名をつけられています。

## 花弁数の変化

野生種のバラはすべて、花弁は5枚です。花弁数のみならずバラほど野生種と現代バラの間に開きのあるものは少ないでしょう。チューリップ、シクラメン、ポーチュラカ、ライラックなどれを見ても、原種をみれば現在に改良されたものを言い当てることは難しくないはずです。では、どうして5枚の花弁のバラが多彩な八重咲に変化したのでしょうか。

それは、雄しべには花弁に変化しやすい性質があり、雄しべの多い花は八重咲きになりやすいのというのがその大きな理由です。ツバキをみても原種のヤブツバキは花弁数は5枚ですが、花芯には立派な雄しべがたくさんあり、年月をかけて八重咲きに改良されていきました。

## 芸術・文化にみるバラ—古代から現代へ—

次にバラが表現された絵画や文学作品を、時代を追ってご紹介します。

### ギリシアで

『イリアス』ホメロス著 紀元前800年ころ

「戦死したヘクトルの遺体にはアフロディーテが霊妙なばらの香油を塗ったため、野犬どもの手にかかることはなかった」

この文からは紀元前800年のころにはすでにバラの香油があったことがわかる。

『歴史』ヘロドトス著 紀元前400年ころ

「ミダスの園には60の花弁をもつ香りのいいバラが植えられていた」  
園つまり庭園があり、バラを植えていたことがわかる。

『植物誌』テオフラストス著 紀元前300年ころ

バラの性質についての記述や剪定や繁殖法についての記述もあり、このころすでにバラが栽培されていたことがわかる。

『ギリシア抒情詩』から アスクレピアデースの詩 紀元前100年ころ

友人を食事に招く時にバラの花環を購入して頭にのせ宴会をした、とある。これは宴会時用に随時バラの花環を売る店があったことが分かる詩。

### ローマでは

『博物誌』プリニウス著 紀元1世紀

各地に植生しているバラの種類、栽培、薬としての利用などが随所に書かれている。

『ポンペイの遺跡』および『皇帝アウグストゥス妃リビアの別荘』にみる壁画のバラの絵。 紀元1世紀。室内に居ながらにして庭園を楽しめる壁画。

### 『ヘリオガバルスのバラ』 アルマ・タデマ画 3世紀頃の様子

ローマの王侯貴族はバラの花弁の中で宴会をするなどした。「ばらに伏す」は贅沢な暮らしを表すと言われた。



ヘリオガバルスのばら

### 『ばら園の聖母子』マルチン・ショーンガウアー(1473年) 画。

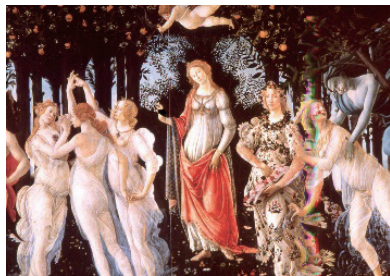
その後キリスト教の台頭により贅沢な暮らしは抑えられバラも修道院の庭で栽培されるのみとなる。ルネサンスまでのあいだ、いろいろな画家によりこのテーマでの絵画が遺されている。バックには一面にバラが描かれているものが多い。



ばら園の聖母子

### ルネサンスで

『ヴィーナスの誕生』『春』(ボッティチェリ)などにみるように15世紀、ギリシア・ローマ時代に返り、自由な発想による芸術を目指したのがルネサンスで、この絵はルネサンスを代表するものといわれている。どちらもバラが描かれ、当時あったバラを知ることができる。



春

### オールドローズ

ここまで作品に表れたバラから各時代におけるバラの利用についてみてきましたが、それらはどのようなバラであったのでしょうか。

ボッティチェリの『春』をみると前述した栽培原種、ガリカローズ、ダマスクローズ、アルパローズの3種がギリシアの時代からこの時代まで変わらず栽培されてきたことが窺われます。これはこのあと17世紀頃まで続くこと

になります。

1455年から1485年にかけての30年間、イギリスでは、ばら戦争がおきます。これはランカスター家が赤バラ、ヨーク家が白バラを掲げて王位を巡って争ったために「ばら戦争」と呼ばれます。結末はランカスター家のヘンリー・チューダーが勝利しヨーク家のエリザベスと結婚し、ヘンリー7世として即位して戦争を終結させます。この赤と白のバラもガリカローズとアルパローズと考えられています。



16世紀になるとオランダで生まれたとされているケンティフォリアローズが加わり、栽培原種は4種となります。このバラは大輪で花弁数が多く香りもよく、華やかな雰囲気をもっていたため、当時の画家たちが好んでこのバラを描き

ルドゥーテ画 ケンティフォリア

「画家のバラ」とまでいわれました。フランスではブルボン王朝時代に好んでこの花が表現され、ルイ15世のポンパドール夫人の衣服にこのケンティフォリアローズがあしらわれている肖像画や、マリー・アントワネットがこのバラを持った肖像画は有名です。

バラの種類が飛躍的に増えたのは19世紀に入ってからになります。ナポレオンの妃ジョゼフィーヌはバラを非常に愛好し、世界から可能な限りのバラを居城マルメゾンに集めたといわれます。そして丁度この頃、中国から四季咲性のあるバラがつぎつぎとヨーロッパへ導入されます。これがジョゼフィーヌの蒐集熱に拍車をかけたことはいうまでもないことです。

この頃のバラの数について19世紀の小説家であり園芸家であったアルフォンス・カールは次のように述べています。「ルイ16世の時代（17世紀）にはバラの数は4種しかなかったが、今の時代（19世紀）には180の種類を数える」。

ジョゼフィーヌはマルメゾンに集めたバラを画家ピエール・ジョゼフ・ルドゥーテに描かせましたが、その『ばら図譜』をみてもアルフォンス・カールのいうバラの数が納得できます。ルドゥーテは全部で169種のバラを描いているのです。描いたバラを系統的に分けてみたとき、中国産のバラも多く描いていることがわかります。それは従来の、美しいけれども春にしか咲かな

いバラに、中国からきた四季咲性のバラを交配することを考え出したことに繋がっていくのです。

ここではっきりさせなくてはならないことはラ・フランスの誕生でモダンローズは始まりますが、オールドローズの歴史はラ・フランスで終わるのではない、ということです。1867年にラ・フランスが誕生した後も続々とオールドローズは新しく世に紹介され続けていたのです。それは20世紀の初頭まで続きます。ごくわずかな例外ですが2000年近くなって発表されたオールドローズもあります。

1945年第2次世界大戦の終戦を記念してフランスのメイアン社が開発したバラがアメリカから「ピース」の名で発表されました。古代よりバラはつねに人の歴史とともにあるといえるでしょう。

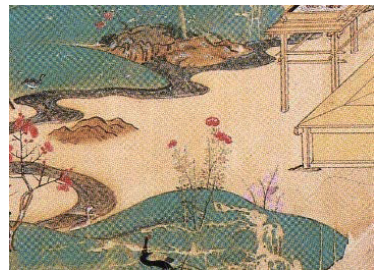
## 日本のバラの歴史

「ばら」に類する言葉が初見されるのは『常陸国風土記』です。「茨(いばら)」で洞穴をふさいで悪者を退治し、その土地を平定したことがら、茨城県の語源にもなっています。

万葉集には一首「うまら (いばら)」をうたったものがあります。これらはいずれも日本のノイバラかそれに準ずる種類でしょう。

平安時代になると様子が変わり、清少納言は「さうひ(薔薇)がをかしく咲いて・・・」と著わし、紫式部は「なまめかしく咲く」と表現しています。どちらもきれいに咲いている様子から、遣隋使か遣唐使により中国から四季咲き性の赤いバラが持ち込まれていたことが想像されるのです。

それを裏付けるように、鎌倉時代に入ってから完成した春日大社の縁起絵巻である『春日権現霊験記絵』には、赤い中国の薔薇とわかるものが描かれています。



春日権現霊験記絵

明治時代に入ると多くのバラが西洋から入り、それらに日本語の名前をつけて、番付表まで作成する、という熱の入れようでした。明治時代にバラが文明のさきがけであることを端的に表現した文をご紹介します「バラの来た道」を締めくくらせていただきます。

夏目漱石著「虞美人草」より

本稿は2015年5月21日に、花と平和のミュージアム南野バラ園オープニング記念講演として行われた講演会の音声記録を元に、筆者が加筆修正して記録としたものです。

[illegible]

- 13 -

## 恵泉・南野バラ園紹介

2015年5月21日 オープニング記念



学園・同窓会協働 バラ園運営委員

## 恵泉・南野バラ園の基本コンセプト ～未来のバラ園を目指して～

- ・野生種のバラを、北半球の4つの地域(中国、アメリカ、ヨーロッパ、日本)に分けて植栽する。
- ・生物多様性の環境を大切にし、無農薬で育てる。
- ・人と植物の自然史・文化の関わりを理解する学習のフィールドとする。
- ・遺伝資源である野生種のバラを保全し、将来的に無農薬で栽培できるバラを地域社会へ提案することを視野に入れる。



2013年1月23日(水) 総勢5名(学生1名)  
寒い中、野村先生と公開講座受講生、学生で、ヨーロッパの野生種植え付け予定地の、チガヤ取り、石拾い。



この日は北アメリカの野生種を植え付けた。  
5月10日に掘っておいいた深さ40cmの穴には、水がたまっていた。排水が悪い。  
半分水をかき出し、牛糞堆肥、骨粉、油粕を元肥えにいれて覆えた。  
その他の苗は、ラベルを付けて園内に仮植えした。

2013年6月14日 総勢17名(学生1名)



2013年10月11日(金) 総勢12名(学生1名)  
ヨーロッパの野生種6株植付け



2013年12月13日(金) 総勢12名  
ヨーロッパの野生種8株植付け



2014年7月18日(金) 総勢12名(学生1名)  
全体の石・ゴミ拾い、雑草・リサイクル用土入れ



2015年4月17日 総勢13名(学生1名)

中国、日本の野生種植え付け、  
通路整備(防草シート張り)

\*講演に先立ち、菊地牧恵さんよりバラ園の造成過程がパワーポイントで紹介された(一部を抜粋)。